



千葉労働運動

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号(動力車会館)
電話(鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 043(222) 7207 番

93.9.16 No.3858

「時短」を増幅する労働強化

効率化を前提とする「時短」

JR東日本は、「一二・一ダイ改」(七月一五日概要提案)と合わせて、「時短」を実施するとし、千葉支社における概要を八月二六日に提案している。

その「時短」の趣旨として、「これまでの効率化努力並びに社員の努力の成果配分であることを踏まえ、効率化・機械化・システム化などを進める」としている通り、現在の年間休日数一〇〇日から一〇九日への移行、九日間の休日増によって、本来必要となる要員を、全て合理化と労働強化で生み出すというものに他ならない。

今後も「時短」は行なわれる!

そもそも「時短」については、労働基準法の改正に伴うものとして、JR東日本は、年間総労働時間一八〇〇時間を目指して取り組むとし、当面の目標を一九九〇年代に所定労働時間一八〇〇時間台(加重平均)に短縮することを計画している。今次「時短」提案においても、年間労働時間が乗務員を除き一九〇〇時間をオーバーしているように、今後も何回かにわたって「時短」が行なわれることは必定である。

「見せかけだけの二七時短」

しかしながらJR東日本当局に、「時短」に伴う要員増など眼中にないことは、「時短」とセットの今次「一二・一ダイ改」の概要を見ても明らかである。

「休日増」が要員増とならず、「人減らしのための人減らし」として、合理化と労働強化へと結びつくのだ。まさに「見せかけだけの二七時短」に他ならない。

吹き荒れる労働強化の嵐

さらに今後「時短」とともに、今後一〇年間に半数以上のJR労働者が、五五才に到達することから見ても、高齢者に対しては出向・勧奨退職、残された職場には徹底した合理化・労働強化の嵐が吹き荒れることは必至である。「時短」によって労働強化が増幅されるという、本末転倒したものとして強行されようとしているのだ。

死活をかけた「一二・一ダイ改」闘争

JR労働者にとって、死活をかけた「一二・一ダイ改」「時短」を前に、JR東労組は、すでに既報の通り提案前に効率化を前提とした時短「覚え書き」を当局と交わし、「働く時に働き、休む時に休む」などと、JRの「時短」を礼賛している。

しかしながらJR東日本だけでも、この六年間に四八〇名が現職死亡、七〇名が業務上事故で死亡と、屍の山が築かれていることから、その根拠は根底から崩れ去る。

堰を切った合理化・労働強化の考え方

「時短」とセットになった、「一二・一ダイ改」には、動力車乗務員に勤乗制度ギリギリの労働強化、隔日交代勤務の職場では予備要員のプール化、変形勤務の拡大、時間帯・曜日による出面の変更、等々、今までは考えられなかったような、堰を切ったような合理化と労働強化が持ち込まれようとしている。

生命さえ売り渡すJR東労組

ことここにいり、誰がJR労働者の首を絞め、過労死さえ常態化する職場環境を導いた者であるか、明明白白であろう。勤乗改悪強行が、今日の大合理化の出発点となり、またも効率化を前提とした「時短」の裏切り妥結へと走る、JR東労組こそ、全JR労働者の権利、生活、そして生命さえも売り渡す、最悪の輩であるということなのだ。

「時短」攻撃を粉碎しよう!

「一二・一ダイ改」闘争こそ、「JR体制」のなかで苦闘する全JR労働者を、その楔から解き放つものとしなければならぬ。「新たな一〇万人首切り攻撃」との対決が不可避なものであるように、見せかけのだけの「時短」攻撃を徹底的に突き崩さなければならぬ。

九二〇回定期大会(九月二五、二六日)の成功を